2010 年 2 月 22 日～2 月 27 日

小西ゼミ フィリピンフィールド活動報告

２月２３日（火）

アジア開発銀行訪問、国際公務員とのディスカッション

ここでは、３名の方の話を伺った。アジア開発銀行の概要やアジアの変貌についてなどを前川さんから「アジアの開発の課題・求められる人材」というテーマでプレゼンテーションをして頂いた。
その後ジョエルさんからは、ADB の戦略とフィリピンでの活動という内容のプレゼンテーションをして頂いた。ADB の重要活動地域や 2011~2016 年の戦略などを話して下さった。
その後教育の専門家である廉里さんからラオスやベトナム、カンボジアの教育や貧困についてのプレゼンテーションを実施して頂いた。

２月２４日（水）

ここではまずＮＧＯである GK(GAWAD KALINGA)の方から活動についてのプレゼンテーションを聞いた。活動内容は主に、インフラ整備、子供など若い世代の開発、住宅建設、環境プログラムなどがある。

GK のプロジェクトサイト視察
ここでは、GK の活動により建設された村を見学した。GK が建設した家というのはとてもカラフルであるということが特徴的だ。この村を見学した際に疑問に思ったことは、ここの人たちは貧困であるはずなのに、テレビがあったりと裕福な生活をしていた。ここでは、50 年間の賃貸契約を結び、家を提供しているのだが、50 年後に彼らはどうなるのかということや、家を建てて貧困の解決になるのかということなど、疑問を多く抱いた。

その後、Manila Observatory の代表であるトニーからプレゼンテーションをして頂いた。そのプレゼンテーションでは、フィリピンで洪水が起こった際の政府の対応や Manila Observatory の対応、政府がいかに腐敗しているのかということや、支援活動の振り返りや課題等について学んだ。

Ateneo School of Government
私立アテネオ大学では貧困や、人権、汚職などについて研究している大学生とディスカッションをした。ディスカッションの内容は、フィリピンの学生にとって日本という国はどのようなイメージなのかということや、彼らがどのような研究をしているのかという内容だった。彼らは、市民を教育し、Active Citizen にしその後、選挙をすることによりフィリピンを変えることが出来ると言っていた。また、フィリピンでは選挙の際に汚職が蔓延っていて、投票するとお金をもらえるということもあるそうだ。

２月２５日（木）

ＮＧＯである TNK を訪問し、フィールドワークとして ダンプサイト（ゴミ山）で生活をする子供たちへの教育支援を実施

このダンプサイトはスモーキーマウンテンを分けて出来たゴミ山である。ここで私たちは、4~5 歳ぐらいの子供達と、9~12 歳ぐらいの子供達に基礎衛生教育や識字に関する教育を行った。4~5 歳ぐらいの子供達には替え歌を使い、手洗いの大切さなどを伝えた。また、9~12 歳ぐらいの子供達には、同じく基礎衛生教育や、アルファベットなどを伝えたが、私たちが予想をしていたより遥かに知識があり、あまり有効的な活動は出来なかった。

２月２６日（金）

国際ＮＧＯである Child Hope を訪問、フィールドワークとしてストリートチルドレン（路上生活者）への教育支援活動を実施。

ここでは、主にストリートチルドレンの現状を学んだ。多くの子供達が虐待などにより家を飛び出しストリートチルドレンとして生活をしている。ストリートチルドレンというのは、日中の大半を路上で生活している子供達のことである。栄養失調や性的搾取、薬物中毒などの様々な問題が子供達の周りにあふれている。この団体では、彼らに Street educator という人たちや Social Worker と呼ばれるフルタイムのボランティアの人たちが、ほぼ毎日教育活動を行っている。この教育は主に夕方以降から行われ、その理由としては子供達は昼間は働いているからということだった。
ここで私たちは、識字教育を行った。歌を使い体の部位を英語とタガログ語で教えたり、日本の四季を紹介したりなどをした。子供達の目は輝いており教育の必要性を実感した。

２月２７日（土）

Missionaries of Charity

ここには、0~5 歳ぐらいの孤児の子供達が生活をしていた。ここの子供達と交流をして感じたことは、今までに合った子供達より笑顔が少ないということだった。私たちは子供達にご飯を食べさせてあげたり、一緒に遊んだりという活動をした。ここの子供達は親からゴミ同然として捨てられていた子供達である。過去に何があったのかは分からないが、子供達の目からは、悲惨な過去が伝わってきた。また、ここでは命とは何かということを心のコミュニケーションで教わった。子供達は言葉がわからなくても触れ合うことの暖かさや、抱っこをすることによる暖かさなどで安心してくれる。これこそが、最も大切な異文化コミュニケーションであるということを学んだ。日本の同年齢の子供達よりは遥かに体重が軽く、彼らの体の重さは命の重さそのものだった。ここで働いておられるシスターの方達は、目の前の命を大切にするということを考えておられ、この子達の将来は分からないが、今を生きる、命をつなげるということに力を注いでおられた。